

主任・学年主任研修を実施しました！

令和6年6月22日(土)、大妻女子大学教授 岡健先生を講師としてお迎えし、主任・学年主任研修をホテル信濃路で実施しました。テーマは、「質の高い保育に向けた園内研修のありかた」です。午前は「今、なぜミドルリーダーの育成が求められるのか」についてお話いただきました。午後は「「しかけ」の重要性とそのための学び」について、ビデオ視聴やグループワークを通して学び合いました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容を紹介します。



<今、なぜミドルリーダーの育成が求められるのか> (午前の部より)

- 保育の質の向上は、保育者の質の向上なくしてはあり得ない。子ども理解は事実+解釈。事実に基づかない解釈の保育は危険である。事実とは具体的な言動や行動、解釈とはその事実に基づいて、気持ちや育ちを考え、結論づけること。子どもの気持ちが分からないと育ちにも気づかず、保育にはならない。事実を拾うことが保育者としての専門性である。
- 保育の質の向上は、保育者の質の向上。子ども理解→ねらい(目標)→手立て→評価というサイクルで行う。(PDCAサイクル) 子どもの理解では、事実に基づいた解釈をすること。評価は、園では振り返りに当たる。再度事実と解釈を結び付けて考え、次のねらいを明確にする。しかし一人の保育者に見えている事実は全てではない。また解釈は保育者の見方で変わってしまう。保育者同士の意見交換をし深めていくことが大切である。
- 「子どものその時の姿によって保育のねらいが変わる。」というお話をお聞きして、子どものねらい、やりたい事を育てたい姿につなぎ合わせていくこと、やりたいと思って始めたことをその先まで伸ばしていくための援助が保育にとって最も重要だということが分かりました。
- 同じ事象を見ていても、「見えていないものがある」という話は、眼から鱗でした。どんな視点で自分が見て、解釈につなげているかを意識すると共に、自分に見えていないものがあるかもしれない。他の人の視点・解釈も参考にし、子どもを見る眼を高めていきたい。子どもの姿から、一人一人の思いに目を向け、次の「やってみよう」につながる保育の手立て、環境を意識していきたい。
- 保育実習についての話がありました。やらないであろう保育、書かないであろう指導案を扱うことで実習生にどのような力がつくのか。保育実習での受け入れについて再度考えたいと思いました。
- 園小の架け橋プログラムがうまくいかないのは、小学校と園のねらいの考え方にある。小学校はカリキュラムに基づいたねらい、園では子どものやりたいことがねらいになる。このお話は非常に大切であり、これまでカリキュラムありきのようなねらいになっていたことを反省しました。
- 「ミドルリーダーが機能しないと園は良くならない。保育とは別に組織をマネジメントしていく力、リードしていく力がミドルリーダーには求められる。」そうお聞きし、改めてミドルリーダーが重要かつ難しい役割であると思った。

<「しかけ」の重要性とそのための学び> (午後の部より)



- 「ミーティングで若手の先生からの意見が出ない。「そう感じることがあります。しかし、それには理由があるということ。こちらが発言しやすい進行の仕方や環境（雰囲気）を作っていく必要があることを学ぶことができました。…「初めてだから分からなくて当然だ!」ということを大前提に、若手の先生たちが積極的に参加できるような「しかけ」を考えていきたい。
- 園内研修をするに当たって、まずは自園の専門性と人間関係を振り返った際、人間関係は「高い」と思っていました。互いに指摘できるまでの関係性には至っていないと先生のお話から感じました。今後は話合いの土壌づくりからやっていく、専門性に繋げていきたいと思います。
- 子どもが苦手に行っている所など、できないことを見てしまうのではなく、良いところを探すように、今後意識していきたいと思います。
- 「虫の目」「鳥の目」の話が特に印象的でした。「確かに!」と思うばかりで、自分の苦手な部分も改めて感じることができ、どうすれば克服していけるかということもよく分かりました。

- 午前の講義でもあった、「見ているけど事実が見えていない」という事を、実際に映像を見て、考えたことで、より具体的に気づくことができました。子どもを具体的にみるという事は、一見簡単そうに思っても、その中には事実から子どもの気持ちを読み取り、どのような手立てが必要なのか、どんな力があるのかなど、様々な視点から考えることなのだと思います。
- 保育者が自分の意見を持つということは、非常に大切な事で、保育者としての質を高めることにつながる。そのためには、ポストイットを活用し、事前に自分の考えをまとめておくなどのしかけが大事であることが分かりました。
- ポストイットを活用し、「ほのちゃん」の行動分析をし、ほのちゃんの子どもの像に迫る研修を行いました。色々な先生方の意見を聞くと、同じような意見もありましたが、違うポイントで捉えている意見もありました。このことは、後輩に対し「その考えは違うよ」とただ教えるのではなく、多くの先生の見えている事を共有しながら、伝えていければ、お互いの学びにつながると感じました。
- 子どもの姿を見ながらのワークショップでは、自分が気づかないうちに子どものマイナスな部分を多く見ていることに気づきました。その事で、こうして上げなければが多くなってしまっていることを感じました。正しい、正しくないではなく、事実と解釈をきちんと結び付けていけるようにしたい。
- 岡先生の話で、「一方的な思い込みで解釈しない」「自分の考え方に固執しない」「こどものできないことばかりを見ない」という所がとても印象に残りました。また、その通りだと感じ、今後の保育や保育者同士の情報共有に生かしたいと感じた。

岡先生の講義の中に、「主体的な子と自主的な子は全く違う」との話がありました。研修のレポートにもその点に触れて記載していただいた先生が非常に多くありました。さて、研修を受けられていない先生方はその違いをどう理解しているのでしょうか。岡先生は、自主的な子は、言われなくてもやる子、主体的な子は、自分に必要なことか、やらなくて良い事かを自分で決める子と説明されました。私たちは日頃の保育でどちらの子どもを目指す子ども像に置いているのでしょうか。今保育の世界では、主体的な学びが強く求められています。しかし、実際には、自主的な子どもを目指す子ども像に据えている園や先生方が多いのではないのでしょうか。園や保育者にとって、都合の良い子どもを育てることは、やりやすい保育につながるのかもしれませんが。しかしそれは子ども主体の保育では決してないことを今一度考えてみる必要があるのではないのでしょうか。ぜひ、各園の先生方で話してみてください。(専門員)